



Humanity & Nature Newsletter

No.36
April 2012

地球研ニュース



トロブリアンド諸島(バブアニューギニア)、キリウィナ島にて。小さな女の子が帚を持ち出して、せっせとお掃除をはじめた。女の子はおままと代わりに家事をし、男の子は遊び半分にカヌーで海に出たりしながら、社会におけるそれぞれの務めを学ぶ
(撮影:細谷 葵)

今号の 内容

P2

特集1●所長と所員による鼎談
地球研のあるべき
研究活動のフレームワークとは
立本成文+酒井章子+林 憲吾

P5

特集2●国際動向の検証
第5回ベルモント・フォーラム
地球環境研究の
新しいステージの構築をめざして
谷口真人+村松 伸+
鞍田 崇+高野(竹中)宏平

P8

■ 百聞一見——フィールドからの体験レポート
客観化も普遍化もしにくい
人の生き方を研究する
石山 俊
出稼ぎ労働者と麻薬、売春、感染症
雲南省のフィールドから
蔡 国喜

P10

特集3●所内共同研究会のあり方について
2011年度EPM (Environmental Policy
Making) 勉強会の活動について
谷口真人+ウヤル・アイスン+
ザンバ・バトジャルガル+
キナジオール・ミュゲ

P12

■ 前略 地球研殿——関係者からの応援メッセージ
「地球研らしさ」による
環境問題のブレイク・スルー
大西暁生

P13

■ 所員紹介——私の考える地球環境問題と未来
山の老人の語り
東ヒマラヤの焼畑の村から
小坂康之

P14

■ お知らせ
イベントの報告、研究活動の動向、
研究プロジェクト等主催の研究会(実施報告)、
イベント情報

地球研のあるべき研究活動のフレームワークとは

話し手●立本成文(地球研所長)

聞き手●酒井章子(地球研准教授)+林 憲吾(地球研プロジェクト研究員)

2007年に就任した立本成文所長。2期6年目を迎えた所長が考える地球研と総合地球環境学のあるべき姿とはいかなるものか。新年度を迎えての意気込みを所員とともに話し合った。

立本●地球研も11年めにはいりました。設立から10年の総括は『地球研10年誌』*1で行ないました。今日は、これを踏まえつつ地球研設立の根本に戻って、あるべき研究活動のフレームワークについて意見を交換したいというのが趣旨です。まずは、三つの図(4ページ)をもとに議論を進めましょう。環境と文化の位置づけについてです。

人間文化と不可分な環境問題

立本●地球研は、「環境問題は文化の問題である」と宣言し、人間と自然との相互作用環の解明を目的にしています。そこに至る研究の統合のしかたについては、2006年度の要覧で初めて出てきます。人間と自然との相互作用環は、生態学などの分野がそれなりに考えてはきました。とはいえ、文化の側面が研究のフレームワークに充分に取り込まれてこなかったように思います。そこで、地球研が考える自然観を整理したものがこれ(図1)です。

地球研のプロジェクトが扱っているのは「環境」の問題であって、かならずしも地球環境ではない。これがこの図に込めたメッセージです。地球環境という客観的な物理システムを指定できても、これは科学者がつくった概念であることはしっかり押さえておくべきです。

私たちが環境問題を文化の問題だとするのは、自然を物理的な世界としてではなく、文化と自然とを風土という概念をもって一体的に捉えようとしているからです。これは生物からみた自然を意味する「環世界」でもなく、人間文化を通して自然をみる視点です。

このような環境の見方を、生態学が専門の酒井さんはどう思われますか。

酒井●私の専門が生態学だからというわけではないのですが、地球環境問題が認識されるようになった理由の一つに、少し前までと違って、地域間の社会経済的な関連が強くなり、地域レベルのことが地球レベルでシステムとして同期するようになったことがあると思います。一言でいうとグローバリズムとかグローバル経済の進展ということになるのでしょうか。これには文化が深く関係していると思うのですが、このことはこの図にどのように込められているのでしょうか。

風土から環境を見つめる

立本●図にある「社会」という言葉には、いま言った政治、経済も含めています。「文化」の定義は難しく、精神的なもの、哲学的なものもすべて含まれますが、私は簡単にシンボルの世界だと捉えています。そして、「社会」、「文化」、「自然生態」の三つで風土が構成されているのですが、この三つは互いに入れ子型になっていることが大事なのです。「地球環境」、「環世界」、「風土」の三つで地球システムを認識していると考えられるわけですが、それぞれのレベルを、地球圏、生物圏、人間圏と分ける考えもあるが、人間圏というのはあいまいです。このことについて林さんはどう思いますか。

林●環境を認識しているのは人間や生物なので、人間文化として環境が位置づけられるのは当然だと思います。だからこそ、問題意識も生まれてくる。

いっぽうで、大気の循環や温度変化などマクロに地球を捉えたときに、地球が物理システムとしてふるまっているようにみえるのも事実です。しかし、このことが強調されすぎて、地球環境研究では、風土の側面があまり重視されてこなかった。なので、風土の重要性を表明しなければなりません。大事なのは、地球環境と風土とがつながっていることだと思います。

立本●この図に込めたメッセージの一つは、地球環境問題を解決するには、地球物理学や生物学だけではダメだということ。地球環境や環世界だけを対象にすべきではないのです。

二つめは、環世界や地球環境という概念自体をつくったのも人間だということです。温度変化も人間が捉えたものです。ただ、それが問題化するの風土として環境が捉えられたときです。温度が上がるのが危険だとかね。つまり、環境研究は、地球環境や生物的世界を人間がどう捉えて、どう適応しているかを研究することであって、それは風土の問題だというのが、この図です。

地域の視点から総合地球環境学へ

林●しかし、風土から地球環境というスケールをきちんと捉えることができているのかという批判がありそうですが。

立本●対象地域のスケールでいうと、地球研はグローバルとローカルの間、メゾ地域です。そう言いながら、琵琶湖や内海でのピンポイントの研究になってしまう。琵琶湖と内海をつなぎ、点を結合させ、総合的に圏として環境問題を考える、さらには、それを地球環境問題と結びつけなければ。地球と地域の問題です。酒井●たとえば、琵琶湖を研究することがなぜ地球環境問題につながるのか。それは、琵琶湖の外がわかっていないと解決できない問題があるということ、それに琵琶湖の抱える問題の研究から他地域の問題にも普遍的に提言できることがあるということだと思います。

立本●それは生態学がしてきたことですね。一つの地域、一つのニッチを研究しながら、それをつないで地球全体の姿を考えるでしょう。だけど、地球環境問題を人間がどう捉えているかという視点が生態学には抜けているわけです。生態学から総合地球環境学へとどう向かうか。

*1 『総合地球環境学構築に向けて—地球研10年誌』 総合地球環境学研究所編 2011年3月

右から
はやしけん
専門は建築学。研究プロジェクト「メガシティが地球環境に及ぼすインパクト」そのメカニズム解明と未来可能性に向けた都市圏モデルの提案「サブリーダー」。二〇〇九年から地球研に在籍。
たちもと・なりふみ
専門は人間学(人類学、社会学、地域研究、環境学)。二〇〇七年から地球研に在籍。
さかい・しよつこ
専門は植物生態学。研究プロジェクト「人間活動下の生態系ネットワークの崩壊と再生」エコプロジェクトリーダー。二〇〇八年から地球研に在籍。



それが二つめのテーマである統合のしかたに結びつくわけです。(図2)

異なるレベルの ディシプリンを縦につなぐ

立本●私の考えている総合地球環境学というのは「トランス」なんです。インターディシプリナリーというのは分野間の相互連携ですが、トランスディシプリナリーは、ディシプリンを超えることです。それを突き詰めていけばサイエンスを超えることにもなる。物理的な世界を扱うだけではなく、もう一つその上に価値とか倫理とか、哲学とかそういう世界があって、それと縦に結びつけなければ、環境学としては総合しえません。

図3に示したように、transには三つの意味があります。地球研のトランスディシプリナリティは、このうちの一つではなく、三つを兼ね備えながら究極的には総合地球環境学という新しいディシプリンをつくることだと私は考えます。

林●では、「総合地球環境学」というのは、この図を縦にあがっていった頂点にあるということですか。

立本●総合地球環境学がヒエラーキー的に上にあるというのではなく、ヘテラーキーな状態です。下の階層が上の階層をコントロールすることもある。下の階層が上の階層とつながった、レベルを超えた統合をするべきです。

林●つまり、総合地球環境学は、この図のどこか一つの枠の中に収まるという意味ではなく、知の体系として、この図のような知のつながり方をしていく状態だということですね。

ディシプリンの超越と統合の責任 を担うのがプロジェクトリーダー

林●ただ、これは一人の頭のなかでなされるのでしょうか。それとも、多様なディシプリンの人たちが集まったプロジェクトにおいて知の交換のあり方が、図のよう

な状態になっているべきなのでしょう。立本●私は、トランスディシプリナリティという知の統合は、個人の頭の中にしかないと考えています。共同研究はあくまで学際的研究、バラバラのものが同じ箱の中にはいつているだけで、ほんとうの統合ではないという立場です。共同研究を進めながら、だれか一人が統合するしかない。願わくはプロジェクトリーダーがその責任をきちんととる。そのような知のありどころとしての総合地球環境学を個人として構築してほしい。

林●酒井さんは2012年度からプロジェクトリーダーになられますね。

酒井●たしかにメンバーをそろえ、それぞれの成果を集めて束ねるだけでは不充分だとは思いますが、たいへんな思いをしながら意見をぶつけあうことが、分野を超えるにはとても大切だと、プロジェクトを進めながら感じますね。

立本●個別のディシプリン、ましてや全部のディシプリンを超えるのはとても難しい。しかし、地球研にくるからには超える覚悟できてほしい。超えるにはどうすればよいかと考えると、最後に「あつ、わかった」といって卒業してもらえたらいい。

フレームワークの 基礎にあるのが設計科学

立本●それを実現するには、ただ共同研究が走っているというだけでなく、研究するうえでの地球研なりのフレームワークが必要です。それを示したのが、図3の世界樹です。

この図にある統合知=consilienceとは、認識科学の統合を意味します。そこから一歩進んだいちばん上の部分がトランスディシプリナリティの領域です。

中央部分は、第I期からの五つの領域プログラムに相当し、その下に昨年からの「生存知」、「風水土」、「山野河海」の三つのイニシアティブからなる設計科学の領域

をもってきました。ふつうなら認識科学があつて、そのうえで設計科学を考えます。そうではなく、意図的に設計科学を下にもってきたのは、たとえば生存知を中心のテーマに据えて未来設計するとどうなるかをまず考え、そこから認識科学を考えるべきだということです。

京都大学 GCOE、東京大学 SS へのアンチテーゼでもある

林●このフレームワークに従って下から上に順に研究を組み立てて実行すると、リーダーを含めたプロジェクトメンバーの頭の中が、さきほどのツリーのような知の構造になるのが理想ですね。いわばプロジェクトの5年間で、どういう順序で研究を構築すべきかを示している。

立本●そうです。総合地球環境学のパースペクティブが開けますよというのが、この図です。下の三つのイニシアティブ(風水土、生存知、山野河海)は、京都大学のGCOE^{*2}や東京大学のグローバルサステナビリティサイエンスのフレームワークに対するアンチテーゼです。京大は、生物圏、人間圏、地球圏。東大は、人間システム、社会システム、地球システムといっていますが、圏やシステムでないのがポイントです。

中央の部分は、循環、多様性、資源、文明環境史、地球地域学の五つの領域プログラムです。設立から最初の5年間は、地球研を立ち上げるのに一所懸命で、外からは個々のプロジェクトがバラバラに見える。そこで、地球研として自然科学だけでなく、さまざまな角度から研究していることを示すために2008年にこれらのプログラムに振り分けたわけです。酒井●現在は、図の下に示されているイニシアティブで採用されたプロジェクトもあります。2008年に領域プログラムの枠組みが考えられたときに、生存知などの下の三つではなく、五つに分けられた意図はなんだったのでしょうか。

*2 グローバル COEプログラム「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」

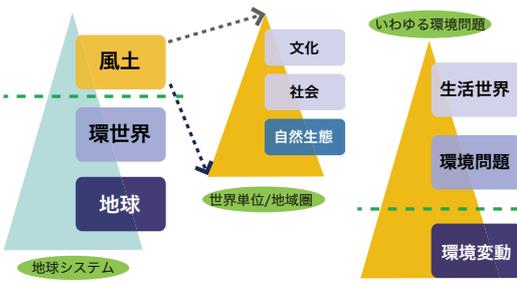


図1 環境と文化のオントロジー

立本●おそらく、そのときは地球研全体の多様なプロジェクトを三つに分けることなどできなかったからでしょうね。いまになって思うと五つのプログラムは、認識科学的な統合の枠組みだったわけです。これに対して、今度のイニシアティブは設計科学的な統合をめざし、そのために三つの枠組みをつくった。それに乗ってまた10年くらい挑戦し、その期待にみなさんのプロジェクトが応える。そういうかたちになればと思います。

酒井●フレームワークの一方に、具体的な問題があり、プロジェクトがある。それでこそ、意味のあるフレームワークですよね。

立本●フレームワークづくりだけやっていたら、それは哲学です。そのフレームワークがよいかどうかは、プロジェクトの成果をみてもらう必要があるわけです。

フレームワーク浸透にむけて行脚の途を

酒井●フレームワークと研究とのあいだに、私はまだ距離を感じてしまう。もう少しつなげるよう努力すると、フレームワークを直す必要が出てくるかもしれない。あるいは、研究の方向性やプロジェクトのあり方を考え直すきっかけになるかもしれない。それができるとたしかに地球研は、それぞれのプロジェクトの垣根を越えて統合できると思います。

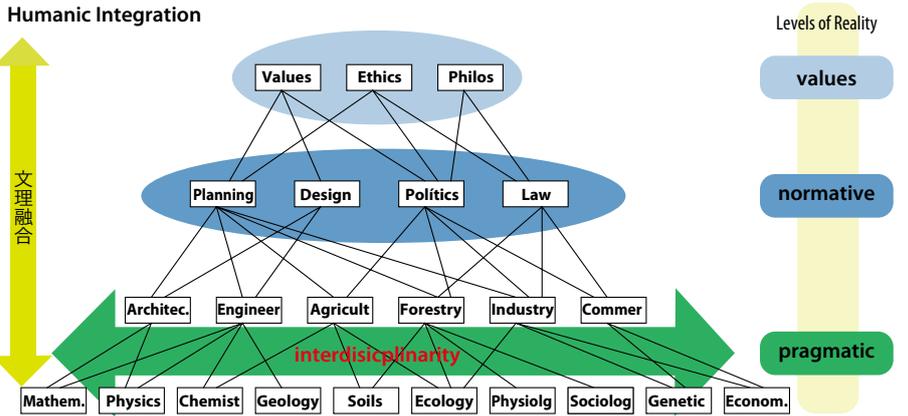
立本●所長や基幹研究ハブが言っただけでは空理空論です。プロジェクトベースでそれをしていただかないと……。

林●各プロジェクトに、このフレームワークが貼っていないとだめですよ。

酒井●でも、研究がフレームワークに従うという一方通行ではない。

立本●そうです。

林●ですが、このフレームワーク自体が



Transdiscipline. Reading the graph from bottom to top, the lower level refers to what exists. The second level to what we are capable of doing. The third to what we want to do. And finally, the top level refers to what we must do, or rather, how to do what we want to do. In other words, we travel from an empirical level, towards a purposive or pragmatic level, continuing to a normative level, and finishing at a value level. Any multiple vertical relations including all four levels, defines a transdisciplinary action.

図2 トランスディシプリナリティ (原図 Max-Neef 2005: 9)

あまり浸透していない節もありますね。
立本●だから、これを取りあげたわけです。このフレームを所内にきちんと浸透させ、ディスカッションしてもらおうことが、この議論の目的。

林●すくなくとも、ぼくと酒井さんの二人には浸透しました(笑)。

酒井●今日のようなミーティングを毎月毎月すればよいのではないですか。

林●フレームワークの伝達行脚ですね。概念図だけだと理解するのに時間がかかりますから、今回のようにプロジェクト二つずつをセットにして回る。

酒井●それは、いいアイデアかもしれませんが。研究員からは、所長と話せる機会が少ないという声を聞きます。

林●ところで、所長のトランスディシプリナリティ度は、どうでしょうか。

立本●ぼくは哲学科社会学専攻出身なので、どうしても図2で縦軸に考えるから、縦につながりやすい。ですが、かならずしも地球科学を充分には理解できていないから規範や価値を扱う科学になって、下まで降りてこない。縦が重要だと地球科学者には言えるが、逆に「それはあなた方のディシプリンですよ」と言われる可能性がある。つまりトランスディシプリナリティではなく、哲学などの上のほうのディシプリンに留まっているのかもしれない。自分ではつなげているつもりでも、そうでないこともある。

林●やはりフレームワークの伝達行脚が大事ですよ。行脚を通して各プロジェク

trans-disciplinary

- 1. across;
- 2. on or to the other side of
 - (a) one discipline
 - (b) disciplines → trans-science

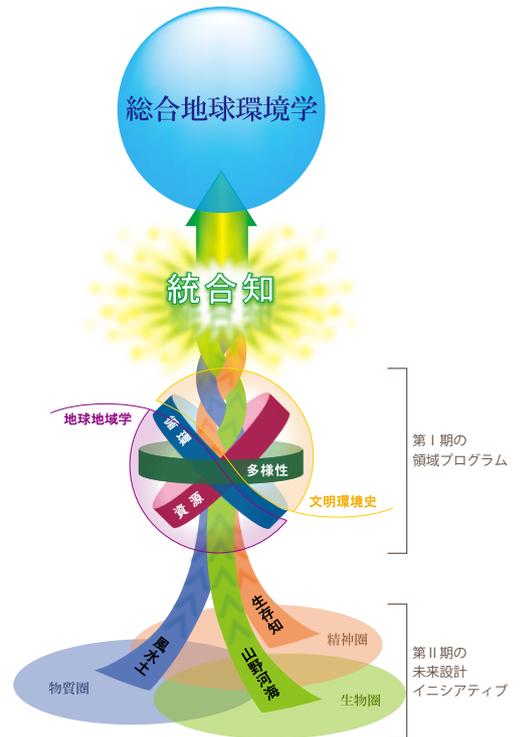


図3 総合地球環境学のフレームワークを示す世界樹 (原図 地球研要覧2011)

トと対話し、所長も所員もともにトランスディシプリナリティを深める。これが、所長最終年度の課題ですね。行脚楽しみにしています。

2012年3月12日 地球研「所長室」にて

地球環境研究の新しいステージの構築をめざして

出席● 谷口真人(地球研教授) + 村松 伸(地球研教授) + 鞍田 崇(地球研特任准教授) + 高野(竹中)宏平(地球研プロジェクト研究員)

地球環境研究にかかわる主要国のファンディング・エージェンシー(研究資金を配分する機関)の関係者が集うベルmont・フォーラム。その第5回会合が2012年1月、地球研を会場に開催された。メイン・テーマは、これからの10年間に地球環境研究が取り組むべき Grand Challenges への対応と方向性。先行する研究テーマの討議とあわせて、新しい研究シーズが検討された。準備作業の中核を担い、フォーラムで発表も行なった谷口真人教授と3人の地球研所員が、地球環境研究の国際的な動向をふまえて、地球研は今回の経験をどう活かすべきか検証する。

村松●ベルmont・フォーラムに参加しての感想はどうでしたか。

谷口●これまで知らないところで動いていた研究資金提供の国際的な枠組みと戦略が、少し見えた。でも、「その枠組みをじっさいに動かすのはたいへんだな」というのが感想です。

鞍田●準備作業で意図したのは、ディシプリンの壁を越えた新しい統合的研究シーズを、所内外の関連分野の研究者とともに提案することでした。私としては、これを機に人文・社会科学系の研究者に積極的に関与してほしいという思いがあったのですが、あまり関心を払ってもらえなかった。反省点の一つです。

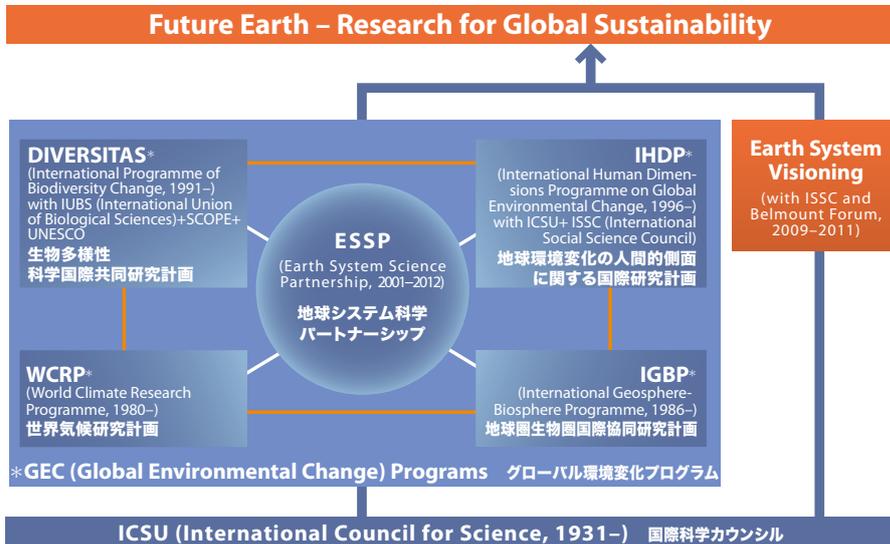


図1 ICSUにおけるグローバル環境変化(GEC)プログラムと Earth System Visioningの流れ
詳細は http://www.chikyuu.ac.jp/archive/topics/2011/symposium_110420_annai.pdf を参照

なぜ日本で開催されることになったのか

村松●ベルmont・フォーラム成立の背景には、二つの問題が考えられます。一つは、ファンディング・エージェンシーが、研究者とどうリンクするべきかという問題意識。もう一つは、地球環境研究に必要な統合的研究の枠組みをどうつくり替えるか。これが今回のフォーラムの目標、ミッションだったのです。

でも、なぜ日本で開かれたのですか。
谷口●二つの理由があったと思います。

もともとファンディング・エージェンシーの国際組織として IGFA¹があります。主要国だけでなく発展途上国も加わっているのですが、所帯が大きすぎて動きがあまりよくない。そこで、より機動的な組織として欧米を中心にスタートしたのがベルmont・フォーラムです。

けれども、やはり世界的な連携は確保すべきだという流れが出てきた。欧米中心から脱却すべきだという議論があり、日本が開催地として選ばれた。

もう一つは、次の10年の体制を議論す

ベルmont・フォーラムの背景

地球環境に関する国際的 研究フレームワークの刷新

高野(竹中)宏平

既存の枠組

地球環境研究に関する既存の国際的枠組としては、グローバル環境変化(GEC)プログラムと呼ばれる四つの組織が存在する。世界気候研究計画(WCRP)、生物多様性国際研究計画(DIVERSITAS)、生物圏国際研究計画(IGBP)、地球環境変化と人間・社会的側面に関する国際研究計画(IHDP)である。それらを横断する

地球システム科学パートナーシップ(ESSP)が2001年に組織され、水、炭素、食、健康などに関するプログラムを実施してきた(図1)。これらの組織に国内的に対応する GEC-Japan が、地球研を事務局として2011年に立ち上げられたばかりである。

枠組の見直し

こうした枠組を後援してきた国際科学会議(ICSU)は、「地球環境変化研究に対する資金提供組織の国際グループ」(IGFA: International Group of Funding Agencies for Global Change Research, 1990年代初頭から活動)と共同で2006年から2009年にかけて GEC プログラ

ムをレビューし、「地域から地球的のスケールに渡り、自然科学と社会科学を統合した地球システム科学」に向けた、「国際的に協調した全体的アプローチの明確な必要性がある」として、研究の「優先順位付け」「有効度」「統合的な研究枠組」を考慮するように勧告した。これを受けた ICSU は国際社会科学カウンシル(ISSC: International Social Science Council)、ベルmont・フォーラム(後述)とともに、2009年から2011年にかけて Earth System Visioning という協議プロセスを設置して、地球環境変化研究の全体的枠組を見直した。

(次ページへつづく)

Transition phase: key events and expected outcomes

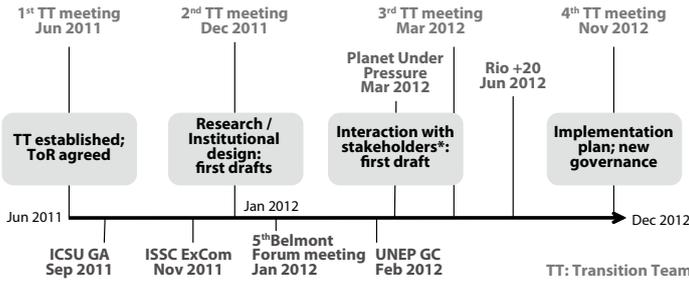
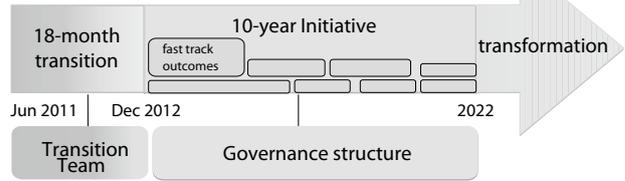


図2 移行期間中のスケジュール
<http://www.scj.go.jp/ja/int/kaisai/jizoku2011/pdf/presentation/prese1-3.pdf>より

Designing the initiative



A Transition Team oversees the design phase on behalf of the Alliance, until a governing body is appointed
 An initiative bound in time, with a long-term impact
 A variety of activities and projects; including a set of fast-tracked priorities for early delivery (3 year)

図3 Future Earth全体のスケジュール <http://www.icsu.org/future-earth/about-initiative/an-introduction-to-future-earth-slideshowより>

る「移行検討チーム(トランジション・チーム)」に日本人がいない。これに危機感を感じていた文科省や科学技術振興機構からのアプローチもあった。

新しい枠組みへの世界的転換と日本の役割

高野●トランジションとは、なにからの移行でしたか。

谷口●地球環境研究の統合的プラットフォームをめざした ESSP²が、あまりうまく機能しなかった。こんご10年を見据え、これに替わる効果的な国際体制をつくるのがねらいでした。

高野●その議論が2012年12月に終わるといことですね。

谷口●そう。そこに日本人が加わっていないことに危機感があった。日本としてはぜひ情報がほしいし、次の体制を決める側に参与したい。日本の研究者がやるべき内容がトレンドから反れる可能性も

あるからですね。

鞍田●村松さんがまとめた問題が二つありました。前者については、もちろん研究者サイドだけで議論できる話ではない。

一方で、新しい統合のかたちを探ることは、地球研のミッションと重なります。今回のフォーラムに地球研がコミットしたのは、後者の視点からだと、私は理解しています。

日本の声を届ける人材育成を

村松●それは地球研としての思惑ですね。日本に誘致したのは、政策決定レベルの人たちの目標で、地球研のミッション・観点とは別次元ではないですか。

谷口●そうした相違をすりあわせる意味もあって、今回は地球研がオーガナイズして、日本発の CRA³を提案しました。

村松●だけど、研究予算を決める世界の動きは、表からは目に見えない、いわば「マフィア」みたいなもの。そこに日本が

どつていど関わろうと、していたのか。

谷口●そこはちょっとわからないね。

村松●それがじつは重要だったのではないかなと思っている。サイエンティフィック・コミュニティとは明確に異なるレベルのことが動いている。

高野●私もそれが気になった。ロビー活動として「日本人をトランジション・チームに入れるべきだ」といったプレッシャーを会議中にかけるのかと思ったが、それはなかった。たぶん、チームは今年で解散するので、いまからではあまり実益がない。そんな理解があったように思う。メンバーとして直接的に参与するのではなく、日本の総体的なプレゼンスを上げることが目標だったのだと思います。

谷口●そうしたロビー活動なり研究マフィア的な仕事をする人を、日本で育てるしくみが、ほんとうは必要ですね。どこかで議論しているのかもしれませんが、それが表には出ていないのが実状です。

研究資金提供機関の動きとしてのベルモント・フォーラムの立ち上げ

これと並行して、気候変動枠組条約、世界的な不況、重要視される問題の変遷などを背景として、地球環境研究に対する資金提供機関の枠組みも変化してきた。アメリカ国立科学財団 (NSF) とイギリス自然環境研究委員会 (NERC) は、2009年6月にファンディング・エージェンシー (研究資金提供機関) の集まりを呼びかけた。第1回ベルモント・フォーラムであるその目的は、主要研究プログラムの co-design (共同デザイン)、co-alignment (共同提携)、co-funding (共同資金提供) を通じて、地球環境変化に対する研究戦略と社会的な優先順位との調整に初期段階からかわること、社会が求める解決策を効率的に提供することである。フォーラム設立の背景には、ICSU を中心とした前述の動きがあると同時に、停

滞していた IGFA の活動を再活性化させ、地球環境研究にかかわるファンディング・エージェンシーが結束することで、各国政府など上位の資金供給源に対する発言力を強めたいという意志も働いているようである。

Future Earthの立ち上げ

前述の Earth System Visioning プロセスは、2010年12月にベルモント・フォーラムと合流した。さらに2011年6月から2012年12月までの期限で移行検討チーム (Transition Team) が設置され、研究機関とファンディング・エージェンシーのより強いパートナーシップをめざしてきた (図2)。その結果、2011年12月に ICSU、ISSC、ベルモント・フォーラムは、国連環境計画、ユネスコ、国連大学などとともに、こんご10年間の新たな統合的研究イニシアチブとして Future Earth – research for global sustainabilityを

発足させた。ESSPにおいて四つに分かれた GEC プログラムでは統合的な研究が進まなかったという反省から、WCRPは独立の組織として残すいっぽうで、IGBP、DIVERSITAS、IHDPは発展的に解消・統合される方向で議論が進んでいる (ただし最終的にどのような組織構成になるかは不透明な状況)。

具体的な研究課題の設定

ICSUとその協力機関は2010年10月に Earth System Science for Global Sustainability: the Grand Challengesも策定した。そこで挙げられた五つのキーワード、Forecasting (予測)、Observing (観測)、Confining (拡大抑制)、Responding (応答)、Innovating (革新) それぞれにおける、優先順位の高い研究課題 (Priority Research Questions) を提示した。

ベルモント・フォーラムもまた、「有害な環



右から
くらた たかし
専門は哲学。二〇〇六年から地球研に在籍。

たかの たけなか こころ へい
専門は昆虫生態、植物生態。研究プロジェクト「人間活動下の生態系ネットワークの崩壊と再生」から地球研に在籍。

むらまつ しん
専門は建築史、都市史、都市環境文化資源学。研究プロジェクト「メカニクスが地球環境に及ぼすインパクト」そのメカニズム解明と未来可能性に向けた都市圏モデルの提案」プロジェクトリーダー。二〇〇九年から地球研に在籍。

たにくち まこと
専門は水文学。研究推進戦略センター研究開発部長。二〇〇三年から地球研に在籍。

編集 ● 鞍田 崇

地球研のスタンスは国際動向と合致する

村松 ● 地球研が、準備作業でのワークショップを踏まえて提案したCRAというのはどういうものだったのですか。

谷口 ● 自然科学と人文・社会科学との連携を意識し、ソーシャル・エコロジカル・イノベーションをテーマとしました。今回のフォーラムでは、提案された複数のCRAをサポートする合意がなされたので、提案者側は議論を継続し、具体的内容をこれから詰める作業にはいります。

村松 ● ソーシャルとエコロジーの統合は、私たちがやろうとしていることでもある。

谷口 ● 自然科学と人文・社会科学の連携という地球研のスタンスに則った枠組みです。この連携については、所内での検討ミーティングはもちろんのこと、所外の方を招いた事前のワークショップでも、多角的に議論しましたね。

鞍田 ● でも、充分だったとは言えない。所内・所外レベルだけでなく、もっと大きな学術コミュニティできちんと議論されるべきだった。ICSU*4とISSC*5が連携を模索している動きがすでにあるとはいえ、既存の人文・社会科学コミュニティが、

地球環境研究にダイレクトに結びつく雰囲気には、まだなっていない。

高野 ● 個人的な印象では、ISSCは社会科学者の組織のなかでもリベラルですね。

鞍田 ● たしかにフォーラムでは、「コアな社会学者はこういう議論に参加しない」という言い方がされていました。

村松 ● 社会科学と自然科学がつきあうには、プロジェクトをつくるのがよいと思う。抽象的な枠組みの話ではむずかしいでしょう。

鞍田 ● だからこそ、先のベルmont・フォーラムへのCRA提案を、これから具体的に鍛えあげることが大事です。ソーシャル・エコロジカル・イノベーションというテーマを、地球研の研究プロジェクトで活かす方向があってもいい。

谷口 ● 地球研はやはりプロジェクト・ベースの研究機関なので、ぜひその方向で進めたいですね。

話は変わりますが、地球研とドイツのIASS*6との連携が現実化しつつあります。先方の所長、クラウス・テプファーさんとの議論で、shrinking societyやenergy transitionが話題になった。いずれもソーシャル・エコロジカル・イノベーションにリンクするテーマです。IASSと、このテーマ

を軸にした連携ワークショップや人事交流を実施することで、われわれのCRA提案を掘り下げることが可能でしょう。

他方、地球研では国際的な動きと対応する戦略としてGEC-Japan*7をつくりました。個別の研究機関だけではなく、こうしたものも活かしたい。

鞍田 ● 自然科学と人文・社会科学との連携を進めるための受け皿の一つになるといいですね。

村松 ● 谷口さん、こんごの取り組みのあり方と計画を教えてください。

谷口 ● まずは、先に提案したテーマの自身をわれわれのあいだでもっと揉む必要があります。そのためのワークショップも連続して地球研で開催する予定です。初回は5月。今日の話も踏まえつつ、あらためてより広い参加を呼びかけます。

2012年2月15日 地球研「はなれ」にて

- *1 International Group of Funding Agencies for Global Change Research: 地球環境変化研究に対する資金提供組織の国際グループ
- *2 Earth System Science Partnership: 地球システム科学パートナーシップ(図1参照)
- *3 Collaborative Research Actions: 国際共同研究活動
- *4 International Council for Science: 国際科学会議
- *5 International Social Science Council: 国際社会科学カウンシル
- *6 Institute for Advanced Sustainability Studies: サステナビリティ上級研究所
- *7 GEC (Global Environmental Change) Programs: グローバル環境変化プログラム

境変化と危機的事象の緩和と適応に向けた行動に必要な知識をもたらす」ための必要項目をBelmont Challengeとしてまとめた。ICSUのGrand ChallengesとBelmont Challengesは、これから10年間の地球環境研究のあり方を相補的に示している。

この2組のChallengesに応えるために、ベルmont・フォーラムは国際共同研究活動(Collaborative Research Actions: CRAs)で優先されるべきテーマを議論してきた。この第1期CRAのテーマを決定することが、地球研で開催された第5回ベルmont・フォーラムの主要目的であった。

2日間の議論の末、第1期CRAsのテーマとして「沿岸の脆弱性」と「淡水の安全性」が採択された。3月のMOUの締結後、国際公募が4月に始まっており、採択されるプロジェクトのうち早いものは2013年に研究が開始され

る。第2期のCRAsとしては、事前会合を元に地球研が提案した「ソーシャル・エコロジカル・イノベーション」、ブラジルとインドが提示した「食の安全性」など5課題が引き続き検討されることとなった。

こんごの課題

こうした国際的な動向には、各国の思惑が反映される。Future Earthの移行検討チームには、日本人が含まれていない。また、ベルmont・フォーラムの立ち上げは米NSFと英NERCが主導した。そうした状況の中で第5回ベルmont・フォーラムが日本で開催されたことは、文部科学省研究開発局環境エネルギー課と科学技術振興機構の意欲的な活動によるところが大きい。

日本の関係者が共通して重要視していると感じたのは、前述のような国際動向をフォロー

して生の情報を収集すること、顔を出し続けてプレーヤーとして認識されること、そしてアジアからの視点を示すことである。

ベルmont・フォーラムメンバーの話からは、人文学・社会科学・自然科学の統合にはどの組織も困難を抱えており、その意味では同じスタートラインにたっているということがわかった。また、「方法論の部分から無理に異分野を統合するのではなく、特定の課題に各学問分野がどのように貢献できるかを考えた方が建設的である」というコメントも示唆に富んでいた。

現在、地球研では基幹プロジェクトと連携プロジェクトの、それぞれの役割のあり方に関する議論が進んでいる。国内外の動向を踏まえながら、地球研、そして日本が効果的に貢献できる体制を整えるべきだと感じる。

百聞一見——フィールドからの体験レポート

世界各国のさまざまな地域で調査活動に励む地球研メンバーたち。現地の風や土の匂いをかぎ、人びとの声に耳をかたむける彼らから届くレポートには、フィールドワークならではの新鮮な驚きと発見が満ちています



客観化も普遍化もしにくい人の生き方を研究する

石山 俊

いしやま・しゅん

専門は文化人類学。研究プロジェクト「アラブ社会におけるなりわい生態系の研究—ポスト石油時代に向けて」プロジェクト研究員。2008年から地球研に在籍。

地球研で自然科学分野の研究者と話をするとつれ、意識するようになった言葉の一つに「科学」がある。「科学」の条件とは、現象の普遍性と再現性、観察の客観性であると私自身は考えているが、どうもそのことがついつい引っかかってしまうのだ。

大地の上で暮らす人の生身の声

私の専門分野は、アフリカ乾燥地域の文化人類学である。もう少し平たくいえば、サハラのアオアシスやその南に位置する半乾燥地(サーヘル・スーダン帯とも呼ばれる)で人びとがどのように生き抜いているかを研究することである。

フィールド調査の方法は至極単純で、観察と聞き取りによることがほとんどだ。つまり観察によって現在の生き方を学び、聞き取りによって過去の暮らしを調べるのである。無文字社会であったがため、歴史資料に乏しいアフリカ乾燥・半乾燥地でも、老人からの聞き取り



アオアシス農業では灌水はもっとも重要な作業である。灌水が一段落して休憩中。聞き取り調査にはもっとも適したタイミングである。私は農作業を手伝っているつもりでいるのだが、ハッジさんにとっては邪魔なだけかもしれない

によって50年から100年くらい前までなら、かつての暮らしのようすをなんとかたどることができる。

そうした聞き取り調査をするときは、話し手のライフ・ヒストリーを絡めながら進める場合が多い。そして話を聞くうちに、客観性が求められる調査ということ忘れて、人びとの「奥深い」生き方に動揺してしまうことも少なくはない。ここでは、「美しい思い出」だけではなく、ときには「どうにもならない厳しい現実」が語られるからだ。

人の生き方を一つひとつ記録する

ハッジさんは、アウレフというアルジェリアのサハラに抱かれた街でオアシス農業を営んでいる。彼は長いあいだ中学校でフランス語の先生を務め、校長にまで出世した人である。農園作業を手伝いながらライフ・ヒストリーを聞くとき、彼は先祖の話までしてくれることがある。

ハッジさんの祖父は、アルジェリアの南方、今のマリ国に住む農民であったが、農奴としてアウレフに連れてこられた。ハッジさんの父君が、オアシス農園を手に入れ、晴れて農園「所有者」となったのだ。若いころのハッジさんは、学校に出勤する前、毎朝5時に起きて父が所有する2haもある農園の世話をしたという。

後にハッジさんは結婚し7人の子供をもうける。ハッジさんの奥さんとなったのはアウレフに住むアラブ系の人で、黒人系のハッジさんとの結婚は周囲の大反対にあったそうだ。

その後、兄弟、姉妹と父の農園を分配相続したため、現在所有し、世話をする農園の広さはかつてほどではない。奥さんが彼女の父親から相続した分を含め、合計1.5haの農園のわずか一部を耕すにすぎない。フォッガーラと呼ばれる地下水路の水量が減ったことと、ハッジさん自身が年をとったため、広い面積を耕すことはもうできないのだ。



ハッジさんの農園では、ナツメヤシと組み合わせて、穀物(オオムギ、コムギ)、野菜(タマネギ、ピーズ、ルッコラ)、ヘンナ(乾燥した葉を染料として利用する)などが栽培される

今年で74歳となるハッジさんの子どもたちの大半はすでに仕事をもったり嫁入りしたりで、アウレフから出て行ってしまった。奥さんも長患いの末、最近亡くなった。いまでは、長女夫婦とその娘が同居するのみである。農園の跡継ぎの心配をするハッジさんの表情は複雑だ。

「量」より「質」の研究者として

サハラのアオアシスでは、ハッジさんのようにオアシス農業を営む人は数多い。そのなかのたとえ数人だけとはいえ生身の人間に接してみると、人の生き方の多様さにあらためて驚かされる。地球上に住む、70億人すべての生き方を調べることはとうてい不可能だが、ある人びとの生き方と、地域の歴史や自然環境を重ねることによって「人と自然のかかわり」の興味深い事例が見えてくるのが、いまの私のささやかな喜びなのだ。いまはどうしても、「量」より「質」に目が向いてしまう。

ハッジさんの「奥深い」人生をいまだ的確に客観化できないのは、私の力量不足なのか。あるいは人の生き方を客観視し、普遍化すること自体がそもそも無理難題なのか、いまのところはまだ分からない。ただ、人の生き方に触れる機会に恵まれることは、「科学者」ではなくとも人の生き方を学ぶ研究者として、刺激に満ちていることは確かなのである。

出稼ぎ労働者と 麻薬、売春、感染症 雲南省のフィールドから

蔡 国喜

さい・こくき

専門は国際保健学、社会疫学。長崎大学研究推進戦略室
リサーチアドミニストレーター。2008年から2012年
3月まで地球研プロジェクト「熱帯アジアの環境変
化と感染症」プロジェクト研究員。

1978年の改革開放以降、中国が驚くべきスピードで社会的、経済的に発展したことは世界的に注目されている。しかし、経済の発展に伴って、さまざまな社会問題も引き起こされた。

経済発展がもたらした病巣

もっとも高い関心を集めているのは、新興・再興感染症*1ととりわけ麻薬使用と性産業の拡大に関連したエイズとC型肝炎の流行と、国内1.5億人といわれる流動人口の医療保障・社会保障問題である。経済開発の副作用とされる都市部と農村部の格差増大により、農村からの出稼ぎ労働者が都市に流れ込んだ。低い学歴や専門知識の不足などのため「3K(きつい、汚い、危険)」職業に従事する人がほとんどである。女性、とくに若い女性の場合は、ナイトクラブ、マッサージなどの娯楽・性産業に従事する人も少なくない。

国境地帯で蔓延する感染症

中国西南部の雲南省はミャンマーやラオスなどの麻薬の生産・密輸地域と国境を隣接している。1990年代から麻薬使用者は急増し、不衛生な注射針の使用や麻薬中毒者の性的接触により、エイズ・肝炎が拡散された。それから20年。最初のエイズ患者は相次いでなくなった。彼らの多くは世間の目を忍び、親族からも敬



性産業が中国各地で氾濫するようになった。女性セックスワーカーのほとんどが外来流動人口である

遠され、死ぬまできちんとした治療を受けることができなかった。

地球研エコヘルズプロジェクト*2 中国班は、中国エイズ・ネットワーク、昆明医学院、中国疾病管理センター(CDC)などの協力の下で、ミャンマー国境地域の臨滄州臨滄区、ラオス国境地域の西双版纳自治州、ベトナム国境地域の紅河自治州箇旧市などで、流動人口、ドラッグ常用者、セックスワーカーなどの脆弱人口を対象とする社会疫学調査を行ってきた。その結果、たとえば臨滄区における230人の麻薬常用者の7割はC型肝炎・HIVに重感染し、西双版纳州の女性セックスワーカーの3割が性病にかかっていることが明らかになった。

感染者の声に耳を傾ける

私の社会疫学調査にずいぶん協力してくれた一人に、雲南省LC県にいるAさん(男性、36才)がいる。共同研究機関の地方感染症管理センターが調査対象として紹介してくれたドラッグ常用者で、共用注射器によりHIVとC型肝炎に感染していた。いっしょに酒を飲み、ビリヤードを打ち、街をうろろうするうちに、心を開いてくれた。

彼は当地のある役人の息子で裕福な家庭の出身だったが、友達の誘いで「新鮮な遊び(ヘロイン吸引)」に手を出したのがきっかけで道を踏み外してしまった。ドラッグ代が払えなくなり、家財を盗んで換金し、HIVに感染したため恋人に去られ、家から追い出された。以前の友達と親類からも見捨てられた。就職したくてもドラッグ使用者として厳しい社会差別を受け、だれも雇ってくれなかったそうだ。「私は生きていく勇気もないし、エイズの発症を待つしかありません。蔡さんは感染症管理センターの職員と違って、本当の友達として付き合ってくれて心か



ドラッグ常用者を対象にした社会疫学調査(2010年3月、雲南省LC区)

ら感謝します。」と彼は言ってくれたが、私はとてもつらい気持ちだった。

社会環境が脆弱性を生み出す

雲南省の錫鉱の町・箇旧。錫の埋蔵量は中国の3分の1を占め、昔から「錫の都」として栄えてきた。2006年の統計によると、箇旧の公的機関に登録されている麻薬常習者は5,226名、その60%はHIV感染者であるとされている。この町の一角にある「労働者村」は、かつて繁栄していた面影を残しながら、今は出稼ぎ労働者の「買春村」となっている。箇旧の性産業の従事者は、麻薬常用者・HIV感染者でもあるケースが少なくない。そのなかには、すでにHIVに感染されたにもかかわらず、医療費や生活費を稼ぐために、接客しつづける人が少なくない。

中国での社会疫学調査を通じて、麻薬常用者、セックスワーカー、流動人口などの脆弱人口がC型肝炎、HIV、性病などに感染した一番の要因は、社会・経済・文化的なファクターであることがわかった。言い替えると、彼らの社会・経済属性とそれに相応する職業、教育、価値観、社会保障により決定される行動習慣によって、感染症に対する脆弱性が生じたといえる。

2003年、新型農村合作医療制度が発足した。現在までに31の省・自治区・直轄市で全面施行され、加入者は8億人に達した。医療費の給付率と給付限度額に地域間格差があるなど、いろいろな問題点を抱えているが、新型農村合作医療制度がもっとも脆弱な流動人口の健康増進に寄与することを期待したい。

*1 近年、新たに発見された(新興)、あるいはいったん減少していたが再び出現してきた(再興)感染症

*2 研究プロジェクト「熱帯アジアの環境変化と感染症」

2011年度 EPM (Environmental Policy Making) 勉強会の活動について

出席 ● 谷口真人 (地球研教授) + ウヤル・アイスン (地球研助教) +
ザンバ・バトジャルガル (地球研招へい外国人研究員) + キナジオール・ミュゲ (ハジェッテペ大学准教授)

2010年春に立ち上がった EPM (Environmental Policy Making) 勉強会。地球研のプロジェクトの成果を国内外における政策立案にどのように反映させるのか、また各国の環境政策がじっさいの環境にどのような影響を与えているのか。環境政策にかかわるトピックを毎回一つとりあげて議論するこの勉強会は、これまで15回の開催を数える。2011年度に議論したテーマと、これからの方向と可能性について語りあった。

ウヤル●2010年度の勉強会を終えた段階で、ローカルな個別の問題よりも、地理的に広範囲なテーマ設定を、との要望があがりました。そこで、グローバル・リージョナルな学術コンソーシアムのあり方や、国際政治学の視点での環境安全保障などに、議論の軸を移したのが2011年度でした。

今日は、直近2回の勉強会で発表いただいたキナジオールさん、バトジャルガルさんと、私といっしょに会の企画・運営に当たる谷口さんにお集まりいただきました。まず、皆さんがこの EPM 勉強会とどうかかわっておられるかをお聞きします。

既存の学問領域を越えた議論の場

谷口●2006-2010年度に都市の地下環境と地下水に関する地球研プロジェクト^{*1}のリーダーを務めました。研究を進めるうち、環境ガバナンスをそれぞれの国の環境政策に則してさらに研究する必要を

痛感しました。そこで設立したのが、アジア各国の都市の水環境ガバナンスを調査し、共同研究を促進するコンソーシアムです。水環境問題の解決に向けたモニタリング、モデリング、そして政策立案がコンソーシアムの目的です。

環境ガバナンスについての議論を深め、プロジェクト終了後も活動をつづけるコンソーシアムをより充実させようと、この勉強会をサポートしています。バトジャルガル●私が招へい外国人研究員として所属するプロジェクト^{*2}は、政策やガバナンスを直接に取り扱っているわけではありません。ただ、私はこれまで世界気象機関などの環境問題にかかわる国際機関で働いてきました。環境政策には、グローバルとローカルのどちらのレベルにも、かねてより興味があったので、この勉強会に参加しています。

キナジオール●第15回 EPM 勉強会で、環境安全保障について、私の専門である国際政治と国際安全保障の視点から発表するチャンスをいただきました。しかし、私はこれまで、自分が専門とするフィールド以外の研究者と議論する経験に乏しかっただけに、環境安全保障の問題は私にとっても、興味のあるテーマで、新鮮な議論ができました。

私たち社会科学の研究者は、自分の専門分野外の人と触れる機会は、大きな会議などに限られます。共同研究をするにしても、同じ分野の研究者が相手です。他分野の研究者とフランクに意見を交換できるこの会は、とても貴重です。

この EPM 勉強会では自然科学者の見方を知るチャンスが得られ、自分たちの狭い世界で研究や成果の発信をしているのではないかという不満が、少し解消されました。

Science for/in Society

ウヤル●地球研は、ディシプリンの枠を超えた総合地球環境学の構築と、あるべき未来を描く設計科学をミッションとしています。EPM 勉強会が、この目標の達成にどれくらい貢献できると思いますか。

谷口●地球環境学を含む学界における最近の傾向は「社会のための科学」、「社会に関与する科学」の重視です。私は自然科学者として、問題を明確に設定し、明確な結果を得たいと思っています。しかし、社会のニーズは多様です。自然科学によって導き出される答えだけで、そのニーズを満たせるわけではありません。自然科学者としての立ち位置に加え、抽象的な考え方や社会的な価値を含めてより広く問題を理解する必要を感じます。

2010年度からスタートした地球研第II期では、社会のニーズに応じた新たな目標を設定しました。つまり、それまでの認識科学にもとづく研究から、社会的な要請の変化に対応すべく、設計科学の方向に軸足を移したのです。EPM 勉強会は、そういう設計科学という私たちの使命を達成するための有効なツールです。キナジオール●私が発表した第15回勉強会で議論されたのは「安全保障は定量分析されるか」という点です。これも科学が社

2011年度のEPM 勉強会の実績

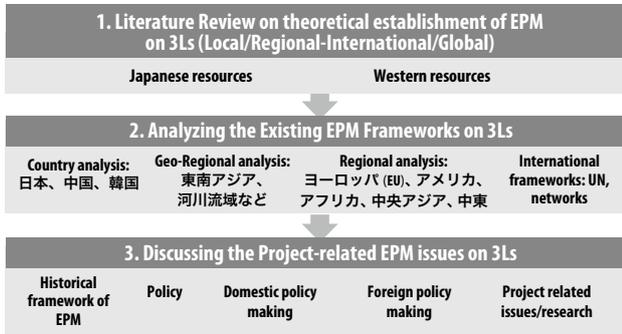
回	開催日	発表者	タイトル (*がついた回は英語で発表と議論がなされた)
9	6月7日	諸富 徹 (京都大学大学院経済学研究科教授)	低炭素経済へ向けた環境政策のポリシー・ミックス Formulation of Environmental Policy towards Low-Carbon Economy
10	6月20日	松井範博 (帝京大学経済学部教授)	災害救援と環境：公共政策のために飢饉から学ぶ * Disaster, Relief and Environment: Learning from Famine for Public Policy
11	7月11日	MCCAULEY, Steve (Clark University / 地球研招へい外国人研究員)	環境ガバナンスに関してイノベーティブ・フォーラム * Innovative Forums for Environmental Governance: Experiences with Energy Sustainability in the Urban Context
12	11月29日	花松泰倫 (北海道大学スラブ研究センター学術研究員)	地域環境協力におけるデータ・情報の共有 Regional Environmental Cooperation and Data-Sharing/Information Exchange
13	12月22日	梅津千恵子 (地球研准教授)	トルコ・セイハン河流域における不確実性下の水管理 * Water Management under Uncertainty in the Seyhan River Basin, Turkey
14	1月23日	ZAMBA, Batjargal (地球研招へい外国人研究員)	北東アジアにおけるモンゴル起源のDSSとそのマイナスと非マイナス影響 * Negative and non-negative impact of the Dust and Sand Storms (DSS), originated in Mongolia for countries in Northeast Asia
15	2月22日	KINACIOĞLU, Müge (Hacettepe University 准教授)	国際政治における環境安全保障 * Environmental Security in International Politics

谷口
KINACIOĞLU Müge
 専門は国際関係論、国際安全保障、ハンガリー・ブダペスト大学(トルコ・アンカラ)准教授。二〇〇九年から現職。

TANIGUCHI Makoto
 専門は水文学。研究プロジェクト「都市の地下環境に残る人間活動の影響」プロジェクトリーダーを経て、研究推進戦略センター研究開発部門長。二〇〇三年から地球研に在籍。

ZAMBA, Barjeral
 専門は気象学。国連世界気象機関顧問。二〇〇一年から二〇〇六年まで駐日モンゴル国大使。二〇一一年から地球研に在籍。

UYAR, Aysun
 専門は国際関係論、国際政治経済。研究推進戦略センター研究開発部門助教。二〇一〇年から地球研に在籍。



EPM勉強会の環境政策分析に対するアジェンダ

会とどうかかわるかの問題です。安全保障は世界各国で最重要のトピックです。ただ、この言葉がなにを意味するかは、それぞれの社会の価値体系によって異なります。人文・社会科学にせよ、自然科学にせよ、それぞれの社会の価値体系から切り離されては存在しえません。社会からの要請に応えなければならず、しかも、その要請は多様です。ですから一つのディシプリンから導きだされる結果だけでは充分ではない。どうしても学際的な研究手法が重要になります。

EPM勉強会のようなイベントが定期的であれば、各ディシプリンが自身の枠を超えて、肯定的な作用をもたらさうことが期待できます。

グローバルとローカルは対立概念ではない

ウヤル●環境問題では、グローバル、リージョナル、ローカルと、さまざまなレベルで研究課題が設定されます。キナジオール●一つのレベルに留まらない、横断的な問題がたくさんあります。問題に対する研究方法や政策のあり方もケースごとに異なります。同じ問題でも、社会によってとるべき政策が異なる場合もある。それぞれのケースにおいて、それぞれのステークホルダーの立場から考えるべきです。バトジャルガル●環境問題のすべての対象は、階層的なシステムで構成されています。

より低次のレベル、サブシステムの研究から出発し、ピースをつなぐことでシステムの全体像を解明する必要があります。グローバルとリージョナル、ローカルを峻別することは困難です。システムおよびサブシステム両方に目を向け、それ

ぞれがどのようにリンクしているかに注視せねばなりません。

谷口●グローバルからローカルか、ローカルからグローバルかの、二者択一だけではじっさいの問題解決には向かいません。横断的な見方で、それぞれのレベルを結ぶ複層的な問題設定が必要です。

ローカルなレベルも、均質ではありません。それぞれに中心と周縁との差異がある。中心の求心力を明確にし、周縁部との関連性を意識することは重要ですね。

新たなトピック「環境安全保障」

ウヤル●今年6月のRio+20サミットでの議題に予定されているように、安全保障の持続的な枠組み構築が話題にあがるようになりました。環境問題を取り巻くグローバルなアジェンダが変わりつつある。

キナジオール●環境安全保障は、社会・国家の安全保障と同じく、「欠乏からの自由」もしくは「恐怖からの自由」の議論で説明できます。環境安全保障は、基本的に「欠乏からの自由」を担保するものと私は考えています。しかし、環境問題が紛争や戦争を引き起こすこともありえます。人間の生存権が脅かされるわけで、この場合、環境安全保障は「恐怖からの自由」とも関係します。

谷口●環境安全保障の基本的な性格は、社会や国ごとに異なります。環境問題が安全保障のいちばんのプライオリティに指定される場合もあります。

バトジャルガル●人間は食料や居住の充足という生物的欲求をもっています。しかし、人間は同時に社会的動物でもあります。よりよい服、よりよい車も必要とします。「欠乏からの自由」という最低限の条件に加え、こうした社会的欲求の充足も、人間の「尊厳ある生活」を議論するさいは考慮しなければなりません。

こんごの課題と方向性

ウヤル●2012年度の会では、これまでの議論をまとめ、成果物として出版したいと思っています。それに、この会を地球研コミュニティの若手研究者が参加しやすい場にしたいですね。

バトジャルガル●EPM勉強会だけではなく、地球研全体で未来設計についての議論をさらに深めてほしい。たとえば、Rio+20サミットの主題である「持続可能な開発および貧困根絶の文脈におけるグリーン経済」と「持続可能な開発のための制度的枠組み」などは、勉強会で取りあげてもよいのではないのでしょうか。

キナジオール●環境・開発問題のあり方が、先進国と発展途上国とで分化していることに注目する議論も重要でしょう。

谷口●今年1月、地球研を会場にベルモント・フォーラム*3が開催されました。そのさいCRA(Collaborative Research Action: 国際共同研究活動)として地球研が中心となって提案したテーマが、ソーシャル・エコロジカル・イノベーションです。これにも、経済発展と環境保全の両方の課題を同時に解決するグリーン経済の視点が含まれます。この提案をEPM勉強会でも取りあげたいですね。

それに、これまでの勉強会で蓄積した議論の成果を、地球研のプロジェクトにいかにフィードバックするかも検討したい。ウヤル●ありがとうございました。

2012年2月23日 地球研「はなれ」にて 英語で行なわれた座談を再構成

*1 研究プロジェクト「都市の地下環境に残る人間活動の影響」
 *2 研究プロジェクト「人間活動下の生態系ネットワークの崩壊と再生」

*3 ベルモント・フォーラムについては本号特集2(5~7ページを参照)

「地球研らしき」による環境問題のブレイク・スルー

大西 暁生 (富山県立大学工学部講師)



左：近代化された北京市。上：内蒙古自治区の灌漑区黄河プロジェクトにおける私の研究は社会経済成長と水利用の関係を考えることでした。持続可能な発展には、経済格差の是正と水不足の解消を同時に解決していく必要があります

私がちょうど博士後期課程に入った2003年、地球研の黄河プロジェクト(研究プロジェクト「近年の黄河の急激な水循環変化とその意味するもの」)に携わるようになりました。その後、2006年4月からはプロジェクト上級研究員として採用され、2年後の終了時までプロジェクトの一員として研究に没頭しました。その間に得た、地球研の目指す人文・社会科学系と自然科学系の「分野横断的研究」の実践は、研究者として育っていく上で今も私の中で大きな財産となっています。

黄河プロジェクトの「分野横断的研究」

とはいえ、初めは大いに戸惑いました。メンバーはリーダー(福嶋義宏教授)を含めて6名と少なく、誰一人として接することなく異なる方向を向いて机が配置されているといった、かわった間取りの研究室でした。これが地球研の目指す「分野横断的研究」の実践的配置なのか!と疑問に感じました。しかし、この戸惑いは最初のうただけで2年間はあっという間に過ぎ去りました。私は、「分野横断的研究」の実践として、このプロジェクトはある程度成功したと自負しています。今後の地球研の発展のためにも、その成功の理由の一端を私なりにお伝えしておこうと思います。

一つ目は、「分野横断的研究」という狙いと逆行しているように思われますが、実は他人の研究にあまり干渉しないことが肝要です。プロジェクトはとりあえずリーダー主導でその方向性を煮詰め、これが浸透した後は、ひたすらその結果を待つことです。これはリーダーの資質にかなり依存しますが、基本的に優秀な船頭は一人で十分です。二つ目は、年一回のプロジェクト内部の報告会を思い切り盛り上げることです。リーダーに対しあるいはメンバー同士が研究についてじっくり話し合える機会として報告会是最適の場です。この時に自分の研究の方向性をしっかり確認することが大切だと思います。ここで得たものをまた次の一年間じっくりと煮詰めればよいのです。三つ目は、研究者どうしのコミュニケーション

を十分図ることです。私たちは昼食やお茶の時間を活用してプライベートや仕事の話などをけっこうワイワイガヤガヤ楽しくやっていました。こんなことでメンバーの人となりを理解出来たことが多々ありましたし、自分のことも分かってもらえたかなと感じました。最後に、自分の属する研究分野での評価をちゃんと意識して、自分の研究の善し悪しを判断することです。プロジェクト研究といえども、個々の研究者がそれぞれの分野で切磋琢磨してこそ、その研究の質が高まると思います。内弁慶にならずに自らの専門分野でしっかり揉まれることが重要だと思います。

私が黄河プロジェクトを通じて得たものは以上です。「地球研らしき」はこうした「分野横断的研究」という難題に果敢に立ち向かうところにあるのでしょうか。

私が黄河プロジェクトを通じて得たものは以上です。「地球研らしき」はこうした「分野横断的研究」という難題に果敢に立ち向かうところにあるのでしょうか。

「地球研らしき」に期待して

地球研の特色は、前述したような「分野横断的研究」を実践していることです。これは、すでに地球研の文化となりつつあり、他の研究組織にはないユニークな特色です。そして、地球環境問題といった複雑かつ深刻な課題に立ち向かうには、まさしく分野を超えた英知の結集が必要です。とりわけ、「人文・社会科学系+自然科学系=環境問題の解決」といった問題解決に全力で資する組織、そして各項の「系」がそれぞれの力(プラス)を最大限に伸ばすことが重要だと思います。さらに、認識科学(人と自然系の相互作用環の解明)の充実とともに、設計科学(地球環境問題の解決に資する研究)に力を入れることによって将来のビジョンが見えてきます。そして、例えば省エネルギー技術などといったハードな対策とともに、人と自然の良好な関係を構築するようなソフトな対策、すなわち新たな社会・経済システムの実現が望まれます。こうしたシステムの定着には時間がかかります。そのため、早急な対応が必要です。これこそ設計科学の真価が問われるところです。そして、「地球研らしき」である「分野横断的研究」が活かされるチャンスでもあります。ぜひとも、環境問題の解決に向けた新しいビジョンを示して欲しいと思います。「地球研らしき」を存分に活かせば、これを必ず実現できると信じています。

おおにし・あきお

専門は環境システム工学、環境・資源経済学、中国の環境問題。現在は中国の社会経済成長と水需給構造の解明、都市環境負荷削減に向けた時空間マネジメントに関する研究などを行っている。2010年10月から現職。



所員紹介—私の考える地球環境問題と未来

山の老人の語り 東ヒマラヤの焼畑の村から

小坂康之

(地球研プロジェクト研究員)



ガロの老人へのインタビュー。ヒンディー語にガロ語やアッサム語が混じる老人の語りを、通訳の助けを借りて、必死に記録する

私たちは、山に対して、さまざまなイメージを持っています。たとえば、地球研から望むことのできる比叡山は、古くから聖地であり、修行の場であり、天然の要害として知られていました。また、山には森林資源の供給地や河川の水源地など、地球環境問題とかかわりの深いイメージもあります。

そして地球温暖化や生物多様性の消失が問題とされるとき、山で焼畑耕作を行なう人たちが悪者扱いされることがあります。私は地球研に来てから、そのようなイメージを離れて、山の人びとの暮らしを自分の目で見たいと思い、東ヒマラヤに通いはじめました。

具体的には、インドのアルナーチャル・プラデーシュ州に広がる山地です。この地域はむかしから、低地の王国の支配に従わない勇猛な人たちの暮らすところとして知られ、現在でも特別な許可を得ないと入域することができません。

言葉を覚え、いざ山へ

山の人びとに会いに行くためには、彼らの言葉を覚える必要があります。そこ

アルナーチャル・プラデーシュ州
北海道ほどの面積に、約110万人が暮らし、その多くがチベット・ビルマ語系の言語を話す人びとである。インドと中国の国境紛争地域で、現在はインドが実効支配している



陸稲の穂刈りに挑戦。右奥には、新しく拓いた水田がみえる

で、アルナーチャル・プラデーシュ州のラジブ・ガンディー大学に長期滞在しました。

滞在して驚いたのは、この地域の言語の多さです。会う人ごとに母語が異なる、といっても過言ではありません。すべての言語を覚えるのは不可能なので、ヒマラヤ地域で広く用いられるヒンディー語を習うことにしました。毎日、ヒンディー語学科の教授のご自宅にお邪魔して、小学3年生の娘さんから特訓を受けました。私が同じ間違いをくり返すと、小さな先生の機嫌が悪くなるので、気を抜けません。

3か月が経ち、片言ながらも会話ができるようになれば、いよいよ山の村へ向けて出発です。

老人たちの 水田と焼畑への思いを記録する

村では、博識な老人たちの語りを記録しました。とくに、1940年代から政府の指導で水田稲作が導入された歴史は、どの老人も熱心に語ってくださいました。

- ▼初めは泥水に浸かって行なう水田の農作業が嫌でたまらなかったけれど、反抗すると大男の役人に殴られた
- ▼村人の山刀と弓矢も政府の持つ銃にはかなわなかったので、村のリーダーたちがしぶしぶ水田稲作を始めた
- ▼1970年ごろに政府が持ってきた新しい水稲の品種は収量がとても多く、それ

を見てたくさんの村人が自分で水田を拓く決心をした

- ▼しかし新しい品種は味が悪いだけでなく5年ほど栽培すると病虫害により収量が大幅に減ったため、土地に適した品種を自分たちで選抜した
- ▼私有地である水田は売買の対象となり、土地価格の高騰の結果、いまでは富とステータスのシンボルとなった
- ▼でも、急斜面が多く、また米以外の作物も重要なため、依然として焼畑耕作を続けている
- ▼私たち老人にとって、焼畑の陸稲のほうが水稲よりも甘みがあっておいしく感じる

それぞれの山地に適した開発と保全

こうした語りの内容は、研究者のあいだで「焼畑の転換」や「緑の革命」として知られ、地球環境問題とも密接に関連する出来ごとです。しかし老人の語りには、そのようなひとことでは片づけられない、問題の多面性を浮き彫りにしています。

地球環境の保全のために、どこかの国際会議場で一律な規則をつくらうとすれば、そのような場で発言する機会をもたない人たちが、不自由な暮らしを強いられることにもなりかねません。

山地の開発と保全について考えるために、私はこれから何度も現地に足を運び、そこに住まう人たちの暮らしを記録として残したいと思います。

■リーダーからひとこと

奥宮清人 (地球研准教授)

小坂さんは、これまで域外の研究者がほとんど入れなかったアルナーチャルに長期滞在し、異分野共同研究の場を整備してきました。さまざまな専門のメンバーから集まった学際的な情報を統合してアルナーチャルという地域を描く—そんな成果出版物につなげる活躍を、プロジェクト最後の1年では期待します。

こさか・やすゆき

■略歴

2006年3月

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究科 一貫制博士課程修了

2006年4月 京都大学東南アジア研究所 非常勤研究員

2008年4月より現職

■専門分野 民族植物学

■地球研での所属プロジェクト 「人の生老病死と高所環境

—『高地文明』における医学生理・生態・文化的適応

■研究テーマ 山地の自然環境と住民の暮らし

イベントの報告

地球研「食リスクプロジェクト」
国際シンポジウム

報告 東南アジアで増大する洪水リスクと
食料・健康への影響
2012年3月1日(木)13:30~17:30
(地球研講演室)

この緊急・国際シンポジウムは昨年10月にタイ、チャオプラヤ川で発生したバンコク周辺の大洪水の問題を受けて、人間文化研究機構と地球研により共催されました。基調講演には(独)土木研究所水災害・リスクマネジメント国際センター長の竹内邦良氏をお招きしました。ほかにタイ、インドネシア、フィリピン、ベトナム、マレーシアの東南アジア主要5か国から6名の食料・災害の専門家を招いて、増大する洪水問題の本質と問題解決への道についての報告と、約50名の参加者も加わった熱心な討論が行なわれました。

アジア諸国では近年、大規模な洪水や土砂崩れなどの災害が頻発し、なにがその背景にあるのか、こんごどんな解決策が必要なのかについて検討が求められています。著しい人口増加と経済成長の負の側面として、そうした災害は下流域に位置する巨大都市圏に巨額の経済被害を及ぼし、同時に、各国の食糧安全保障や人びとの健康被害の拡大など、さまざまな「災害の国際連鎖」をもたらしていることが指摘されました。こんごの方向性として、上流域での土地利用の見直しや規制強化、森林・農地保全の具体化、制度・政策の抜本見直し、そして災害予測体制の構築などの諸点が挙げられました。(嘉田良平)



地球研「シベリアプロジェクト」
第1回 国際会議

報告 Global Warming and the Human-Nature
Dimension in Siberia: Social Adaptation to
the Changes of the Terrestrial Ecosystem,
with an Emphasis on Water Environments
2012年3月7日(水)~9日(金)(地球研講演室)

地球研「シベリアプロジェクト」が主催する第1回目の国際会議を「東ユーラシア北方域における気候とエネルギー・水・炭素収支に関する第6回国際ワークショップ」との共催で開催しました。参加者数は、ロシア14、オランダ5、韓国1、中国2、米国1、国内38の計61名でした。

設定されたセッションテーマは、①プロットスケールでの水・炭素収支、②ユーラシア大陸スケールでの水・炭素循環と植生の関係、③永久凍土劣化とメタン動態、④地下水動態、⑤解氷洪水による災害と恵み、⑥トナカイなどの資源動物の動態、⑦温暖化と社会変化による人びとの適応、の7つです。議論のなかで、東シベリアの植生が気温依存なのか水分依存なのかを明らかにすること、永久凍土層の水・熱環境の長期モニタリング、大気-植生のフィードバック過程、数十年以上の時間スケールでの大気水循環解析などの重要性が再認識されました。

いっぽう、シベリアでの気候変動を考慮した場合、地域住民にとっては連年連年代表される社会変化(社会的ネットワークの崩壊)が大きな影響を与えており、それが顕著に現れるのが、交通の便が悪くて辿り着くのが困難な地域(到達困難地域)であることが示されました。気候変動と社会変化を境界条件として研究する場としては到達困難地域が適当であり、学際的なケーススタディをこんごも積み上げる必要性があらためて認識されました。



世界水フォーラムの地球研ブース

最終的には、このようなケーススタディをロシア連邦サハ共和国(現地政府)あるいはそれより上位の政策決定者に伝える努力が必要であるとの議論がなされ、このような視点で、次回の国際会議を、2013年の秋にロシア連邦サハ共和国のヤクーツク市で開催することが合意されました。(檜山哲哉)

第6回 世界水フォーラム
World Water Forum

報告 2012年3月12日(月)~17日(土)
〈フランス マルセイユ
バルク・シャノン国際会議場〉

3年に1度開催される世界水フォーラムが、今年フランスのマルセイユで開かれました。地球研は前回に引き続いて日本パビリオン内にブースを設置して、研究内容の紹介を行ないました。とくに水にかかわりの強い「水土の知」プロジェクトがポスターを掲示するとともに、プロジェクトに属する外部のメンバーや所内の若手研究員がブースに立って来場者に説明をしました。さらに、イベントスペースを使って研究発表を行ない、それを基にして活発な議論が交わされました。

また、人間文化研究機構総合推進事業の連携展示の一環として、フランス人児童と日本人児童を対象としたワークショップおよび展覧会を開催しました。この催しにはフランス側事務局の多大な協力が得られ、展示会場としてメインホールを使用して、フォーラム参加者への十分なアピールができました。(管理部研究協力係長 新野正人)

*ワークショップの詳細は次の記事をご覧ください。研究発表の詳細は、本誌次号(No.37)で紹介する予定です。

研究プロジェクト等主催の研究会(実施報告)

2012年2月1日~3月31日開催分

開催日	タイトル	主催(プロジェクトリーダー)	開催場所
2月1日	第4回 基幹FS「東アジア成熟化社会」研究会「ケイパビリティアプローチから個人と社会を眺める」	佐藤洋一郎	地球研セミナー室
2月1日	メガ都市プロジェクトシンポジウム Agro-megacities: The role of farming for sustainable development of mega-urban regions	村松 伸	地球研会議室
2月4日	第10回 ジャカルタ都市研究会「アジア・メガ都市の価値観を捕捉する」	村松 伸 京都大学東南アジア研究所 GCOEプログラム 「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」	東京大学 生産技術研究所
2月9日	第3回 ラオス保健研究会	門司和彦	地球研講演室
2月10日	第3回「水土の知」プロジェクトセミナー「流域環境学と環境ガバナンス」 「琵琶湖流域ガバナンスにおける住民参加手法の評価と課題—マザーレイク21計画の再策定プロセスを事例として」	渡邊紹裕	地球研セミナー室
2月13日	田中PR「砂漠化をめぐる風と人と土」研究会	田中 樹	地球研セミナー室
2月14日	第79回 地球研セミナー Thinking about Environmental Sustainability: Lessons from the USA and Japan	地球研	地球研講演室
2月14日	第4回 基幹研究ハブ勉強会「設計科学的統合の表現方法2: 社会」	基幹研究ハブ	地球研セミナー室
2月15日	第6回 基幹研究ワークショップ	基幹研究ハブ	地球研セミナー室



水と文化——子どもたちがつくる国連環境ポスター展ワークショップ

地球上の水をわかちあい、私たちはつながっている——感性から理解へアプローチする環境教育のワークショップを、世界水フォーラムにて実施しました。日本とフランスの子どもたち22名は「国連子ども環境ポスター」を読み解き、多様な水と文化に出会いました。そして大きな1枚の紙に水の音や色をいっしょに表現したあと、みずからの水体験を小さなフレームに切り取りました。閣僚会議も行なわれる Palais des Congrèsにて、子どもたちは世界各国の会議参加者に、水への思いを母語で書き綴ることをよびかけました。そして一人ひとりの水が連なりつながる展示をつくりあげました。フランスパビリオンでは、地球研の環境ポスターワークショップがムービーで紹介され、阿部健一地球研教授が公開討論に参加しました。この人間文化研究機構連携展示は、フランスの地方自治体 Seine-Saint-Denis 県、(財)河川環境管理財団、同志社小学校、現地日本人学校関係者の協力を得て実施しました。(NPO法人平和環境もやいネット 飯塚宜子)

東日本大震災復興祈念コンサート&写真展

報告 2012年3月12日(月)17:30~19:30
 (地球研講演室・エントランスホール)
 主催:地球研

共催:ハンガリー文化センター、日本ハンガリー友好協会、北海道大学 GCOE境界研究の拠点形成後援:ハンガリー大使館

東日本大震災の発生から1年。地球研では、震災からの復興を祈念したコンサートと写真展を開催しました。雪のなか78名もの方にお

2012年度開始研究プロジェクト紹介

(基幹研究プロジェクト)

研究課題名	プロジェクトリーダー
地域環境知形成による新たな commons の創生と持続可能な管理	佐藤 哲(プロジェクトリーダー代行)

(連携研究プロジェクト)

研究課題名	プロジェクトリーダー
東南アジア沿岸域におけるエリアケイパビリティの向上	石川智士
砂漠化をめぐる風と人と土	田中 樹

連携 FS 再審査結果について

2011年度実施されたFSについて総合地球環境学研究所 研究プロジェクト実施細則第4条第9項にもとづき、研究プロジェクト所内審査会における再審査の結果、下記研究課題が2012年度も連携FSとして継続することが決まりました。

研究課題名	責任者	所属
東アジア生業交錯域における水と人間——現代と伝統から探る未来可能性	村松弘一	学習院大学東洋文化研究所客員研究員

FSの継続について

(基幹 FS)

2011年度実施された基幹FSについて総合地球環境学研究所 研究プロジェクト実施細則第3条第6項にもとづき、下記研究課題が2012年度も基幹FSとして継続することが決まりましたのでお知らせいたします。FS責任者はそれぞれ交替することとなります。

研究課題名	責任者	所属
東南アジアの生存力と自律性: 土地利用とリソース・チェーンからの検討	谷口真人	地球研教授
	(2011年度FS責任者) 横山 智	名古屋大学大学院環境学研究所准教授
東アジアにおける環境配慮型の成熟社会: 社会保障と環境保障の統合	窪田順平	地球研教授
	(2011年度FS責任者) 佐藤洋一郎	地球研教授

(連携 FS)

2011年度実施された連携FSについて総合地球環境学研究所 研究プロジェクト実施細則第4条第11項にもとづき、下記研究課題が2012年度も連携FSとして継続することが決まりましたのでお知らせいたします。

研究課題名	責任者	所属
高分解能古気候学と歴史・考古学の連携による気候変動に強い社会システムの探索	中塚 武	名古屋大学大学院環境学研究所准教授

IS報告・FS移行発表会について

さきに行なわれましたIS報告・FS移行発表会の結果、下記2件が2012年度から連携FSに移行することが決まりましたのでお知らせいたします。

研究課題名	責任者	所属
知を共有化する環境リテラシーの表象と向上	石川 守	北海道大学大学院地球環境科学研究科准教授
小規模経済を基礎とした人間と環境の新しい相互関係の構築——大規模経済の脆弱性克服をめざして	羽生淳子	カリフォルニア大学パークリー校教授

越しいただきました。

オープニングのピアノ演奏のあと、「追悼・鎮魂、そして未来可能性——地球研と東日本大震災」と題し、地球研の村松伸教授により、写真家の浅川敏氏作成のスライド

ショー(背景曲付き)と地球研の震災に対する取り組みの紹介がありました。後半のコンサートでは、ハンガリー在住の音楽家ヴェドレシュ・チャバ氏(ピアノ)がご自身の曲を能



チャバ氏(ピアノ)と加藤氏(能管)による協奏のようす

管(加藤修氏)、バイオリン(家田堯氏)と協奏されたのははじめ、山元浩司(歌)と湯川美佳(ピアノ)両氏による東北の民謡、田呈媛(フルート)と河合珠江(ピアノ)両氏の協奏がありました。写真展では、被

災地と世界の国ぐにとの交流を記録したパネル、震災前から現在に至るまでの岩手県大槌町の風景の写真を展示し、皆さん熱心にご覧になっていました。(熊澤輝一)

前ページより

開催日	タイトル	主催(プロジェクトリーダー)	開催場所
2月18-19日	人間文化研究総合推進事業 国際シンポジウム Rice and human migration in Asia	佐藤洋一郎	地球研講演室
2月22日	第15回 EPM勉強会 Environmental Security in International Politics	EPM勉強会	地球研セミナー室
2月29日	第7回基幹研究ワークショップ	基幹研究ハブ	地球研セミナー室
3月1日	食リスクプロジェクト国際シンポジウム「東南アジアで増大する洪水リスクと食料・健康への影響」	嘉田良平	地球研講演室
3月1日	第4回「水土の知」プロジェクトセミナー	渡邊紹裕	地球研セミナー室
3月2日	第80回 地球研セミナー 2 types of colonization: Hokkaido and South-Ussuri area (late XIX - early XX cent.)	地球研	地球研セミナー室
3月6日	第30回 中国環境問題研究拠点研究会「中国のエネルギー開発と農村環境問題——山西省を中心に」 「中国農民の衛生環境と医療保障」	中国環境問題研究拠点	地球研セミナー室
3月7-9日	シベリアプロジェクト国際シンポジウム	檜山哲哉	地球研講演室
3月8日	第3回 リポゾトリ研究会	研究推進戦略センター	地球研セミナー室
3月13日	第5回 基幹研究ハブ勉強会「利害関係者の階層性1: 地域」	基幹研究ハブ	地球研セミナー室
3月16日	第81回 地球研セミナー Mongolia's dilemma with its development paradigm	地球研	地球研講演室
3月27日	資源・地球地域学合同プログラムセミナー「クリーンエネルギーのための10のソリューション」	資源領域プログラム 地球地域学プログラム	地球研講演室

イベント情報

詳しくは地球研HPをご覧ください。 <http://www.chikyu.ac.jp>

第47回 地球研市民セミナー

告知 東南アジアの環境破壊と食卓のゆくえ
2012年6月22日(金)
16:00~17:30(15:30開場)
(地球研講演室) 入場無料
今回はいつもと開催時間が異なります。ご注意ください

東南アジアの多くの国々には、経済発展にともなって生態系が劣化して、食料の供給、食品の安全性、さらには人びとの健康がしばしば脅かされています。環境問題と食料問題とは密接につながっているのです。そこで私たちは両者の関係に注目して、フィリピンの首都マニラ近郊に位置するラグナ湖の集水域をおもな対象として「食のリスク」について実証研究を行なっています。異常気象、都市化・工業化の進展、土地改変などの環境変化によって、人びとの食生活や健康にどのような影響がみられるのでしょうか。どうすれば食の安全・安心を確かなものにできるのでしょうか。皆さんといっしょに考えたいと思います。

【講師】 嘉田良平(地球研教授)
●申込み・問い合わせ先 地球研 総務課企画室
Tel: 075-707-2173 Fax: 075-707-2106
E-mail: shimin-seminar@chikyu.ac.jp



刊行 人間文化研究機構監修
『HUMAN—
知の森へのいざない』

Vol.02 2012年3月発行
平凡社 定価1,500円+税

地球研が岩手県大槌町、
東京大学大気海洋研究所国
際沿岸海洋研究センターと

共同開催したシンポジウムをもとに「被災地大槌町の過去、現在、未来」を特集。自然と共生しながらどう復興をめざすか、研究者と現地がいかに協力すべきか、熱く語られます。窪田順平地球研教授の論考「中国の環境問題」も収載。

編集後記

地球研公式 Facebook ページを開設しました。地球研の日常や研究のこぼれ話も載せていますので、地球研や研究プロジェクトについて、より身近に感じてもらえればと思います。また、今号より新しい編集メンバーでお届けします。(編集室)

地球研公式 Facebook ページ

<http://www.facebook.com/RIHN.official>

編集委員 ●阿部健一(編集長) / 佐藤 哲 / 田中 樹 / 鞍田 崇 / 熊澤輝一 / 源 利文 / 林 恵吾

第11回 地球研地域連携セミナー
FUKUOKA

告知 東アジアの「環境」安全保障：
風上・風下論を超えて
2012年6月10日(日)
13:00~17:30(12:30開場)
(エルガーラホール・8階大ホール(福岡市))
入場無料

【趣旨説明】
大槻恭一(九州大学東アジア環境研究機構教授)
阿部健一(地球研教授)

【講演】
「東アジアの大気・海洋越境環境問題」
柳 哲雄(九州大学東アジア環境研究機構教授)
「黄砂と生態系のつながりを探る」
中野孝教(地球研教授)
「江戸から学ぶ循環社会
—アジアの知恵を世界に」
矢部光保(九州大学東アジア環境研究機構教授)
「国境を越えた環境協力の可能性」
窪田順平(地球研教授)

【ワークショップ報告】
ウヤル・アイスン(地球研助教)
アジアからの留学生(九州大学)
【パネルディスカッション】 柳 哲雄、中野孝教、
矢部光保、窪田順平、ウヤル・アイスン
コーディネーター: 島岡隆行(九州大学東アジア
環境研究機構教授)、阿部健一

●申込み・問い合わせ先 地球研 総務課企画室
Tel: 075-707-2173 Fax: 075-707-2106
E-mail: moshikomi@chikyu.ac.jp

人事異動

2012年3月31日付け
【定年退職】
秋道智彌(研究推進戦略センター教授)
川端善一郎(研究部教授)
山村則男(研究部教授)
【任期満了退職】
梅津千恵子(研究部准教授)
窪田順平(研究部准教授)

【辞職】
湯本真和(研究部教授)
久米 崇(研究推進戦略センター特任研究員(特任准教授))

2012年4月1日付け
【名誉教授称号授与】
秋道智彌
川端善一郎
【採用】
石川智士(研究部准教授)
窪田順平(研究推進戦略センター教授)
佐藤 哲(研究推進戦略センター教授)
清水万由子(研究推進戦略センター特任研究員(特任助教))
【配置換え】
谷口真人(研究部教授)
→研究推進戦略センター教授へ

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
総合地球環境学研究所報「地球研ニュース」
Humanity & Nature Newsletter No.36
ISSN 1880-8956
隔月刊

発行日 2012年4月15日
発行所 総合地球環境学研究所
〒603-8047
京都市北区上賀茂本山457番地の4
電話 075-707-2100(代表)
E-mail newsletter@chikyu.ac.jp
URL <http://www.chikyu.ac.jp>



編集 定期刊行物編集室
発行 研究推進戦略センター(CCPC)

制作協力 京都通信社
デザイン 納富 進

本誌の内容は、地球研のウェブサイトにも掲載しています。郵送を希望されない方はお申し出ください。

本誌は再生紙を使用しています。